紀　行

オリーブ・アンスティ国際看護カンファレンスに参加して

金　川　克　子

1．はじめに

1988年11月29日～12月2日にかけて，オーストラリアのパースで，オリーブ・アンスティ国際看護カンファレンスが開催され，日本から私も含めて9人の看護婦が参加し，また演題発表の機会も得ることができました。

このカンファレンスはオリーブ・アンスティ（1920年～1983年）を記念したものであり，世界各国より約300人が参加していました。

オリーブ・アンスティは1958年～1981年まで西オーストラリアのセント・チャールズガイドナー病院の看護部長の職責にあり，1977年～1981年までICNの会長を務めた人です。セント・チァールズガイドナー病院が、彼女のこれまでの貢献を讃え、西オーストラリア州の資金援助も受けて，オリーブ・アンスティ基金を作り，看護の実践，管理，教育の発展に寄与しており，今回の国際看護カンファレンスの開催に至ったようです。

2．カンファレンスの概要

カンファレンスのメインテーマ“professional promiscurity”（訳が困難であり，専門性の崩壊の意味に近いと思います）と，とても興味あるものでした。

カンファレンスのプログラムは、大きく分けて，基調講演，一般口演，ポスターセッション，展示と，施設見学であり，使用されるこ

とばは，すべて英語です。

まず，基調講演は５つあり，初日にはイギリスのマンチェスター大学の看護部長の Baroness Mctarlane of Llandaff 教授による「純粋性にむけての探究—実践のための科学的基盤」と題した講演がありました。

この中で，同教授は専門職上の純粋にむけて，実践のための科学的基盤の確立が重要であると指摘していました。そして，看護職として，古い看護婦の考え方をすてること，理論の多元的展開を図り，純粋理論の研究から実践的適用を図ること，看護の価値観を常に明確にして，何が基本的価値か，何が単なる伝統的な価値かを考えること，ビジョンを作り，それを明確に表現すること等の主旨を講演されました。

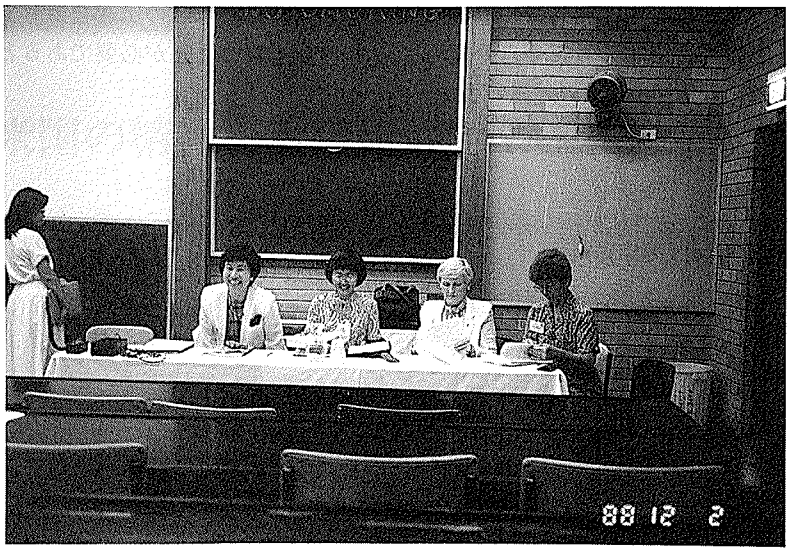
次に，カナダのクィーンズ大学の Alice Baumgart 教授による「看護教育のきのうと明日」と題した講演では，1980年代には人口分布，疾病の質，看護職の政治への進出，看護職の考え方等さまざまな面で変化が起こっており，看護教育でも新しい組織化が必要であること，また種々の問題への対応や判断のしかたの教育が大切であると述べておられました。さらに，病院内でのケアと地域でのケアの連携を保ち，両者の新しい関係作りも強調されていました。

その他には，ボッワナ大学の Serara Kupe 博士による「2000年までにすべての人々に健康を」と題した講演では健康は単なる病気の反意語ではなく真の意味を考えることの大切さを挙げ，病院から学校，家庭，職場にむけて，各自が健康に自信を持てる様な政策，即わちプライマリケアの必要性を説いておられました。

一般口演は分科会方式であり，政策的なもの，看護研究，看護実践，看護教育，法律および倫理上の問題，専門的問題，コンピューター等，多岐の領域で56題の発表がありました。

私も当短大部の泉キヨ子，前川弘美との共同研究で“Nursing Professions in care for the elderly（老人看護における専門性について）”と題して，石川県の特別養護老人ホームで働いている看護婦，寮母，指導員の老人に対するケアの実態と，各職種の業務に期待するケア内容を調査，分析して，老人看護における専門性とは何かの発表を行いました。

会場から，日本における特別養護老人ホームの1963年からの急激な増加や寮母職の資格



の問題などの質問を受けました。わが国では介護福祉士や社会福祉士の新しい資格制度が1988年より誕生している現状だけに，これらの職種とどのように連携を保ちながら，毎日の実践を進めるか，又，老人看護における看護の専門性は何かを改めて考える機会になりました。

なお，分科会での発表形式は、丁度日本看護協会主催の看護学会のように，発表者（4人）が順番に口演を行ない，後で一括して質疑応答の時間を設けるもので，1つのセッションで90分の時間が割り当てられていました。また発表は、抄録集は用意されていましたが，スライドやOHPの使用は許可されており，視聴覚教材の活用は，発表内容を理解させ易く，ことばのハンディを背負っている時には，特に有効性を感じました。

カンファレンスの会場は，西オーストラリア大学であり，開会式は同大学内のウインスロープホールで厳粛に行なわれました。

カンファレンスのプログラムは前述の通りですが，その他には，参加者の交流も深めるように歓迎レセプション，夕食会，川下りとバーベキューの会など，盛沢山であり，主催者側の気の使い方に敬服しました。

施設見学は病院が中心であり，フリーマントル病院（365床），キングエドワード・メモリアル病院，プリンセス・マーガレット小児病院（250床），ローヤル・パース病院（800床）等9つの病院と，看護の大学2ケ所であり，参加者は各々希望に応じて見学の機会を楽しみました。

私共の訪れた時は，オーストラリアは初夏の気候であり，西オーストラリアの西側に位置したパースは水と緑で象徴される，とても美しい所であり，成田より直通便が就行しています。

3．おわりに

最近は，看護に関する国際的な会が，比較的多く開催されており，日本からの出席もよく行なわれていると耳にします。

私も何回か国際学会（又は類似の会）に参加した経験を持っていますが，いつも感ずることは，ことばのハンディです。

ことばは，お互いの意志を伝達し合う重要な手段でありますが，やはりことばの不自由さから，日本の看護や自分達の思いが，充分に伝えられず，場合によっては，過少評価を受けることさえあります。

看護の国際交流が進む中，諸外国の看護の動向にも目をむけて，日本の看護や自分達の看護の方向を考える素材にしたいと思います。そのためにも，語学力の向上が重要であることと同時に，意志の伝達を憶せず行なっていく度胸も持つことが必要であると痛感しました。